

野猪
名稱

し熊二疋迄、浮川の谷川の邊りに伏し居たり、數の子藏の破れを見て、さては數の子を飽まで喰ひて水を呑に相違なしと、各鎗にて突殺せしに、服中にて數の子ふへ増して、腹大にふくれし故にうごき得ずして、安々と松前人にとられしと物語なり、奥路にも馬を取りし事、數の子を喰し事、すべて同様也。

〔西遊記 續編二〕熊膽

松前邊にては乗馬にても、小荷駄馬にても野外に出て、其山の近きあたりに熊居れば、匂ひを嗅得て、その馬恐れ立すくみて、小便おのづから出て、一步もあゆむ事能はず、斯のごとくなれば、武家などの乗馬は、多く南部の馬を用る事とぞ、奥州地には熊無きゆへ、南部生れの馬は知らざるゆへ、熊を恐れず、初にこれを試るに、馬場の真中に熊の皮を敷て馬をすゝむるに、松前生れの馬は恐れてあゆまず、南部生れの馬は皮の上をもよくあゆむなりとぞ。

〔本草和名十五〕猪一名豨魚頼反、長過三尺者曰豨一名老猪、又有豨山甲反、牝猪大者名也、出崔禹、猪一名蒙貴、一名属員出兼一

名參軍出古、和名爲乃之○之下恐

野猪黄、和名久佐爲奈岐。

〔倭名類聚抄十八〕野猪 本草云、野猪和名久佐

〔箋注倭名類聚抄七〕原書獸部下品載野猪黄、此所引即是、本草衍義云、野猪形如家猪、但腹小脚

長、毛色褐、作群行、獵人惟敢射最後者、射中前奔者、則群猪散走、傷人、李時珍曰、野猪其形似猪而大、

牙出口外、如象牙、其肉有至二三百斤者、或云能掠松脂、曳沙泥、塗身以禦矢也、是猪之在野者、可以

充爲、今俗謂之爲乃志、蓋轉猪肉之名呼之也。○中按八雲抄、狸訓久佐爲奈岐、則知久佐爲奈岐

爲狸屬、而爾雅狸、狐、貉、貉爲一類、廣雅、獬豸也、說文、獬豸、野豕也、玉篇、獬豸、野猪、故訓野猪爲久佐爲奈岐、

蓋輔仁載、崔氏食經、猪訓爲乃志之、故本草野猪无可充者、而玉篇以野猪爲獬豸一名、於是訓久佐爲